

聖書：マタイ 6：19～24

説教題：天に宝を蓄える

日時：2018年9月9日（朝拝）

今日のみことばのテーマは自分の宝をどこに蓄えるかということです。皆さんにとっての宝は何でしょうか。自分にとって大切なもの、かなりの関心とエネルギーと時間と財とが注ぎ込まれているもの、それなしには自分の生活が考えられないようなもの、自分にとってのまさに生きがい・喜び・楽しみ・慰め。ある人にとってはお金、家、車、スポーツ用品、楽器、パソコン、スマートホン、その中に詰まっている色々な情報かもしれません。イエス様はそれらの宝を自分のために地上に蓄えるのはやめなさいと言います。「そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます」と。この言葉を聞いて私が思い起こすのは大学生時代に、それまでの貯金をはたいて買ったバイクの事です。最初は 50cc の原付に乗っていましたが、街中を車と一緒に走るのは怖くて中型バイクの免許を取りました。そしてカタログなどで調べてホンダのNSR というレースにも使える性能が高いバイクを買いました。それはさすがに快適でした。今は市販されていない2サイクルという瞬発力のあるエンジンを搭載していてスタートダッシュは格別。朝、学校に行く時に交差点で信号待ちをしていると、同じく学校に向かう沢山の学生のバイクが集まって来ますが、信号が青になって一斉スタートしてもわがNSRはまず誰にも負けない！まさに私にとっての宝物でした。ところがです。大学3年生の時、企業見学で三日間留守にして帰って来たところ、アパートの前のバイクの位置が変わっている。しかも雨よけのカバーが無造作にかけられている。おかしいと思って急いで調べたところ、何とエンジンの側面を覆っていたカウルが割れていました。誰かが勢い良く倒してしまったに違いない！そこで私は近くの住人に聞きこみ捜査をしましたが、どうも目の前の狭い道路を通ったトラックが引っ掛けたようだという事でした。しかし数日不在にしていたこともあり、そのトラックを突き止めることはできず、泣き寝入りするしかありませんでした。本当にショックでした。そんな中、翌年に同じNSRがモデルチェンジして発売されることを知り、私は買い替えようとかと真剣に悩みました。先立つものはないのに色々計画を立てました。しかしそうやってやっと購入したとしても、また同じことの繰り返しになるのではないか。また傷がついてがっかりするだけではないのか。ここに自分の幸いのすべてがかかっているかのようにして追い求めるのは危険ではないか。色々考えました。そして最終的に買わない道を選択した時、自分が何か取り付かれていた束縛から解放され自由になったと感じたことを思い起こします。今の私

にとっての宝は何でしょうか。私は音楽を聴くのが好きですので、そのためのプレーヤー、ヘッドホン、音楽ソフト等が思い浮かびます。そして時々思わされることは、もし火事や事故によってこれらのものが全部失われても私は大丈夫だろうか。それらに私の喜びや楽しみがよりかかり過ぎない生活、支配されない生活をしているだろうかということ。皆さんはいかがでしょう。

そんな私たちにイエス様は 20 節で「自分のために、天に宝を蓄えなさい」と言います。「そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません」と。天は神がおられて神が守っておられるところですから、そこにある宝が壊されたり、傷ついたりすることはありません。また天には腐敗の要素が一切ありませんから、そこにあるものはいつまでも古くなることはありません。自分の宝はその天に蓄えなさいとイエス様は言われます。

まずこの言葉を聞いてハッとさせられることは、私たちはどこに向かって歩んでいる者かということです。その答えは天です。私たちはこの地上で生きて、この地上で死ぬだけの人生を歩んでいる者たちではありません。本来、神の前に罪を犯した私たちは、神がおられる天、神の祝福が満ちている天に入るなどできませんでした。しかし神はイエス様を通して、その方の十字架の犠牲を通して、信じる者たちを天に迎え入れ、ご自身とともに永遠に生きる幸いへと生かしてくださいます。そのような将来が私たちの行く先には用意されています。であるなら私たちはどこを見つめて生活すべきでしょうか。最終ゴールの天から目を離し、途中の地上のことばかりに思いを向け、やがては傷がつき、消えて行くものにばかりかかずらう歩みをすべきでしょうか。それともやがて必ず入る栄光の天を見つめて、その天にいつまでもなくなる宝を積む生活をすべきでしょうか。私たちの人生の目的地を見据える時に、イエス様のこのお言葉は俄然リアルな言葉として私たちに迫って来ます。

ではどのようにすることが宝を天に蓄えることなのでしょう。天は神がおられ、神の御心にかなうことのみが満ちているところですから、そこに残るものは神が良しとされるもの以外ではあり得ません。ですからそれは神に喜ばれる私たちの地上における生活と言えます。神はそれを良しとされて、いつまでもなくなる宝として天に蓄えてくださる。これはもちろん私たちが自分の良い行いによって天国の救いや、そこでの祝福を勝ち取るという意味ではありません。私たちが神に喜ばれる生活をするのは神が私た

ちをまず愛してくださったからです。聖書は私たちのなすべき歩みとして大きく二つのことを述べています。一つは「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」、もう一つは「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」。私たちはまず神を心から愛して神の戒めに従う生活をするようにと言われていますが、神は一方的にそのことを私たちに要求しているわけではありません。その基礎は神がまず私たちを愛してくださったということです。そのことは私たちの救いのために神がご自身の一人子さえも惜しまずにささげてくださいましたことに証しされています。この神に感謝して、私たちは神を愛し、神の御言葉に従う歩みをささげるのです。神はその私たちの応答の歩みを喜ばれて、それをいつまでも残る宝として天に蓄えてくださいます。またこの神への愛は私たちの隣人を愛することとセットのものとして聖書に述べられています。神を愛する者として、私たちは神が大事にしている私たちの周りの人々をも愛し、大切にしておくべきであると。具体的には十戒後半の隣人愛の戒めにあるように、父母を敬うこと、殺さないこと、姦淫しないこと、盗まないこと、偽証しないこと、むさばらないことを、その根本精神に沿って実践することと言えます。あるいは聖書は私たちが他の人にする愛のわざは神にすることだと言っています。箴言 19 章 17 節：「貧しい者に施しをするのは、主に貸すこと。主がその行いに報いてくださる。」 同じことがこのマタイの福音書の 25 章 31 節からの部分にも示されています。天の御国に入る時、主はある人たちに「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渴いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」と言って、祝福を受け継がせてくださる。その人たちが「いつ主よ、私たちはそんなことをしましたか」と問うと、主はこう言われるとあります。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」 また I テモテ 6 章 18～19 節：「善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。」 その他、人々の救いのために伝道すること、神の御国の完成のために祈り、労すること、また自分に与えられた働きを忠実に行って神の栄光を現わすこともそうでしょう。

ある人はこのように聞いて窮屈だと思ってしまうかもしれません。もっと自分のために生きてはダメなのか。地上ではひたすら自分を否定し、神と隣人のために生きなければならないのかと。もちろん聖書は一人一人の財産権を認めていますし、地上の将来の生活のた

めに適切に蓄えるべきことも命じていますし、神が与えてくださった喜び楽しみ味わうべきことも述べています。しかし同時に、この世の生活は天の生活に入るまでの一時的な時であり、この世で私たちが手にしているものは、やがて死ぬ時にはすべて手放さなければならないという意味で私たちのものではないと述べています。それはやがての日まで神から一時的にお預かりしているものに過ぎない。ですから私たちは神のものを一時的に預かっている管理人・管理者として、地上にある間、それをどのように使ったか、やがての日に神に報告を出さなければならない。その時に、ただ自分のためにだけすべてを使いましたと言うのでは何のすぐれた事にもなりません。しかし地上で委ねられたものを神に喜ばれるように用いるなら、神はそれをいつまでも価値が残るものとして天における宝としてくださるのです。厳粛な事実、そのように天に宝を蓄えることができるのは今しかないということです。やがての永遠の生活に比べれば、地上の生活はほんの短い一時にしか過ぎませんが、しかしこの短い期間、地上で私たちがどう生きるかということは実に私たちの永遠の将来を決定する非常な重みと価値を持っているのです。地上の生活の時間はどんどん過ぎ去って行きますが、私たちはこの貴重な時を無駄にやり過ごしていないでしょうか。大切な将来に備えて尊く用いる歩みをしているでしょうか。

イエス様は21節でこう言われます。「あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。」 私たちの宝はどこにあるのでしょうか。そこにあなたの本当の心はあると言われています。「いや自分は神様を第一にしています」と言っても、自分の宝物は何か、それを見ればあなたの心はどこにあるかが分かる。そのことに対する思いが、何をしていても、学校で勉強していても、今、教会堂で礼拝をささげていても、あなたの心を深いところをつかみ、あなたの全生活をコントロールする力になっている。そこで問うべきは、その宝は果たして地上的なものであることはないかということです。やがては過ぎ去り、天国には相容れないものであることはないか。もしそうだとしたら、それに心を縛られて一生を終えることは無駄なことのために人生を費やすことになってしまいかねません。私たちは自分の宝を慎重に吟味すべきです。そして地上的なものではなく、天に残るものと宝としたい。それによって私たちの心と生き方が絶えず天に向き、益々天に宝を蓄える歩みへと導かれて行きたいのです。

イエス様はこの教えを強めるために、さらに二つのたとえを語っています。一つは22～23節です。「からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明

るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか。」 当時、目は光を体の中に取り入れる器官と考えられていました。そこから光が入ることによって体はどう動けば良いか判断できる。そういう意味で目が健全だと全身が明るくなると言えます。もちろん目の見えない人でも、その他の感覚を通して十分に不足を補うことのできる人もいますし、かえって色々なことをよりよく捉えることのできる人もいます。しかしここでは一般的な意味で言われています。これは何を言っているのでしょうか。それはあなたの心の目が健やかなら、すなわち神をまっすぐに見つめる澄んだ目を持ち、また天を見つめる信仰の目を持っているなら、その健やかな目から神の光が注ぎ込まれて私たちは色々なことを見分けて神の光のうちに歩むように導かれるということです。まさに全身も明るいという状態となり、行くべき道を選び取り、天のゴールに至る道を進んで行ける。しかし目が悪ければどうなるでしょうか。すなわちその目が澄んでおらず、天を見上げるよりは地上の事柄に目が釘付けになっている状態ではどうなるでしょう。その人は全身が暗くなります。その人のうちに光はない。神の光が注ぎ込まれないので色々なことを見分けられない。とりあえず目の前で良いと思ったことを選び取って一生懸命もがいて生きるが、どんどん誤った方向に進む。そしてついには天にたどり着くのととは反対の真暗闇の状態に至る。

もう一つは24節の二人の主人のたとえです。「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。」 ここで神と富が並べて記されています。これは富は神のライバルになり得るということです。私たちの心の王座から神を追い出し、自らがそこに上り、神などいないという偽りの安心感を私たちに与える。その一例をルカの福音書 12 章の金持ち農夫のたとえに見ます。金持ちは豊作になって、もうこれからは大丈夫だ！物が一杯ためられた。わが魂よ！これからは安心して食べて、飲んで、楽しめ！と自分に向かって語った時に、神が彼に現れて言われました。「愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」 ですから私たちは警戒しなければなりません。富に心を奪われ、富に仕える道は誤った道に行くことです。そうではなく、神にこそ仕えるというもとで富を正しく活用する生き方を求めなければなりません。富はこの世にある間、一時的に私たちに管理を委ねられているものです。それは神の御心に沿う形で正しく用いるべきものです。そうするなら神は地上の富にはるかに勝る宝を

天に蓄えてくださる。それこそいつまでもなくなる、将来、真に私たちのものとされる富です。

今日のイエス様の御言葉に照らして私たちの生き方はどうでしょうか。やがて傷ものになり、滅びるものを熱心に求めて、後の日にがっかりする歩みをしていることはないでしょうか。それともいつまでもなくなる宝を天に蓄える歩み、そして最後の日をいよいよ楽しみにする歩みをしているでしょうか。それは言い換えれば、イエス様が言われたように、私たちの目は健やかな状態にあるのか、それとも悪い状態にあるのかということでもあります。私たちは神を見上げ、また神が導き入れてくださる天を見つめて、私たちの目を健やかな状態、澄んだ状態にさせていただきたいと思います。そのような目を持つなら、私たちの心には光が入って来て全身が明るくされます。やがての日を見据えてどのように歩むべきであるのか、識別力を与えられ、益々天に宝を蓄える歩みへと導かれます。やがては過ぎ行く地上のものに心を捕らわれ、その奴隷となり、最後に神から「愚か者！」と言われる歩みではなく、私たちの前に開かれている「天」というゴールを見つめ、その光に照らされて、天にこそ宝を蓄える生活に励むことができますように。そしてやがての日に「よくやった！良いしもべだ」と言って神に迎え入れられ、その天にいつまでもなくなる宝が神によって保たれていることを発見する幸いに生きて行きたいと思います。